

P1-017

幼児面接調査用レジリエンス尺度開発の試み：子ども、保護者、教諭の回答比較

石山 あづ美¹⁾、赤間 公子^{2,3)}、金納 史佳³⁾

常葉大学 保育学部 保育学科¹⁾、
信州豊南短期大学 幼児教育学科²⁾、
EUREKA 京都 L & T Lab.³⁾

【目的】レジリエンスは困難な状況にもうまく適応する能力であり、精神的健康に必要な要因とされている。レジリエンスの研究は小児精神医学の領域において進められ、その後教育学へとその対象を拡大してきた。この能力に関する研究は、幼児期の教育分野において近年注目されている非認知能力、あるいは社会情動的スキルの育成にも寄与するものであると推察される。これまで私たちは、高辻 (2002)、長尾ら (2008) が開発した保育者評定用レジリエンス尺度を参考としながら、幼児本人が回答する方式の尺度を作成し、2回のパイロット研究を実施してきた。その過程で場面想定がしやすい図版も導入してきた。開発中の尺度の標準化を目指して本研究では、幼児に加えて保護者および幼稚園教諭に幼児と同様の項目から成る質問紙調査を実施し、三者回答の比較を行った。この検証を経てより妥当性のある尺度に修正していくことを目的とした。

【方法】保護者の Consent と幼児本人からのアセントが得られた 3-6 歳児親子 42 組を対象とし、A 子育て支援センター (27 組、2019 年 8 月) および B 幼稚園 (15 組、2020 年 2 月) にて、幼児には構造化面接調査を、保護者には質問紙調査を実施した。幼児は面接者と対話しながら 3 選択肢 (○×?) から回答する方式とした。両調査には 20 項目で構成されたレジリエンス尺度を用いた。文言は新版 K 式発達検査の「了解」の項目を参考に、4 歳児に理解可能な表現を用いた。B 幼稚園では 15 人の幼児について、担任教諭からの評価としての回答を記載してもらった。記述統計および χ^2 乗検定により分析を行った。

【結果】有効な 41 組 (4 歳児：9 組、5 歳児：13 組、6 歳児：19 組) の回答を分析の対象とした。全体として○の回答が、幼児からは 81.3%、保護者からは 70.7% であり、幼児の全般的自己評価と比較して保護者からの全般的子ども評価が有意に低い傾向がみられた ($p < 0.01$)。幼児と保護者の回答一致率が低い項目は、尺度の「ストレス耐性」「自己調整」のカテゴリーに属する項目であった。一方、教諭からの○の回答は 80.3% であり、幼児回答との間に有意差はみられなかった。

【考察】保護者による子どものストレス耐性・自己調整に代表されるレジリエンス評価は、全般的に低い傾向があることが示された。他方、教諭からの評価は幼児本人との差がみられないことが示唆された。今後も保育機関からの協力を得ながら、尺度標準化を進めていきたい。

P1-018

保育者養成における子育て支援—地域子育て支援センターにおける身体計測を通して「できない」ことから得られる子ども・保護者理解への学び—

大西 薫

岐阜聖徳学園大学短期大学部

【問題と目的】保育者は、通常の保育に加え、子ども・子育て支援の観点を持ち、実践を行うことが求められている (幼稚園教育要領・保育所保育指針)。養成課程においては、保護者対応のための知識・技術を習得する科目はあるものの、実際に学生が親子や保護者と関わる機会は乏しい。そのような現状を踏まえ、2000 年以降、養成校における子育て支援が報告されるようになった (2018, 中村ら)。しかし、そのような報告の多くは、学生が主体的に参加することができているものの、どのような活動を通して保護者とのようにかかわり、そこでどのような学びを得たのかということが明確になされていない。そこで本研究では、保育者養成校の学生が地域の子ども及びその保護者との身体計測という活動を通じたかかわりについて詳細に提示し、そこで得られた学びについて明らかにすることを目的とした。

【方法】学内に設置された地域子育て支援センターにおいて、2019 年 4 月から 2020 年 1 月までの 10 ヶ月、全 10 回の身体計測場面の参与観察をするとともに、身体計測実施後に、活動の振り返りを参加学生と筆者で行った。振り返りは、良かった点 (自分だけではなく、ほかの学生の対応を含める)、次回に向けた改善点は必ず話すように伝え、その他は、学生同士で自由に語ってもらった。その語りを分類し、援助技術について・子どもに関すること・子育て・保護者に関すること・保育者が行う子育て支援、に関する語りを抽出した。

【結果と考察】実践を通して、良かった点を語るように促しているものの、「できなかった」ことを多く語っていた。体重計に乗ること自体は苦痛を伴うものではないにもかかわらず、子どもたちから泣かれると、学生は援助技術そのものを否定的に捉えていた。保護者から離れたくないと思う子どもへの対応困難さがある反面、子どもが嫌がるからこそ、保護者と学生が一緒にあやしたりする姿が見られた。また、親子のやりとりを自然な形で観察できる機会になっていた。そして、子どもに拒否されることで、楽しませるための保育援助技術 (環境構成、手遊びなど) を向上させ、次の実践に繋げようとする学生の姿が見られた。月 1 回とはいえ、継続した活動だからこそ、子どもの発達理解につながっていた。このように、身体計測の活動自体は子育て支援と直結しないものの、支援に向けた学生自身の子ども・保護者理解に寄与するものと考えられる。